

観察記録 (Observation)

兵庫県内で採集されたヌメリタンポタケの白色子実体（アルビノ）の発生状況の長期的推移

Long-term observation of albino fruitbodies of *Tolypocladium longisegmentum* collected in Hyogo, Japan

平山 吉澄

Yoshizumi Hirayama

兵庫県姫路市

Himeji-shi, Hyogo, Japan

E-mail: hirayama-y@sound.ocn.ne.jp

Article Info: Submitted: 12 October 2022

Published: 31 December 2022

はじめに

著者は1993年4月に、兵庫県赤穂市のスダジイ、コジイ林において、ヌメリタンポタケ(*Tolypocladium longisegmentum* (Ginns) Quandt, Kepler & Spatafora)の白色子実体（アルビノ）を兵庫県内で初めて採集したので報告する。ヌメリタンポタケの白色子実体（アルビノ）は以下、シロヌメリタンポタケ（仮称）と記す。

発生地は兵庫県赤穂市周世の千種川東岸に位置する高雄山で、頂上部付近の周囲が小高いカルデラ状の盆地である。発生地は広葉樹主体の森で、スダジイ、コジイにモミが数本混じる。周囲から雨水が集まり、狭い谷から盆地外へと山を流れ下る地形となっており、林内には2つの小さな池と井戸が存在する。また、広葉樹林内には歴史的に有名な忠臣蔵の大石内蔵助とゆかりがある神護寺跡（林内の案内板より）が在り、神護寺跡周辺以外の部分は「赤穂ふれあいの森」として整備され、キャンプや地元自治会の祭行事等に利用されている。

経緯

シロヌメリタンポタケ（仮称）や発生地環境の変化に関する現在までの経過を以下、年度順に報告する。

1989 年

シロヌメリタンポタケ（仮称）の発生地を含む兵庫県赤穂市周世、高雄山神護寺周辺の森1.4 haが兵庫県の環境緑地保全地域に指定され、案内パンフレットが作成された。

1993 年

3月8日、そのパンフレットで高雄山神護寺のスダジイ群落の存在を知り、赤穂市でのきのこ調査観察を開始した。神護寺周辺の森へ初めて足を踏み入ると恐ろしいほど暗く、目が慣れるまで進めなかった。森の中には人が住まなくなって久しい古い平屋（神護寺庫裡跡）が在り、その周囲の林床は全て苔で覆われていて、上層からの僅かに差し込む光の光景は案内パンフレットに記載されていた通り、正に「幽玄」といった雰囲気だった。著者にとって、この様に上層が発達し高湿度な林内に身を置くことは初めての体験だった。

4月1日、林内の盆地最深部にある扇状地で初めてシロヌメリタンポタケ（仮）に出会い、同時に林内5か所で群生していたヌメリタンポタケ1本との比較写真を撮った（図1）。これら2種の標本は当日に姫路科学館へ収めた。



図1. シロヌメリタンポタケ（仮）（右）とヌメリタンポタケ（左）。

4月18日、林内2か所目の発生地を見付け、シロヌメリタンポタケ（仮）の生態写真を撮影した。

6月4日、神戸新聞に写真が掲載された。兵庫教育大学生物学教室の山口修教授へシロヌメリタンポタケ（仮）の標本を寄託した。

1995年

6月10日～7月9日、姫路科学館の「冬虫夏草展」で標本と写真が展示された。

赤穂市により、高雄山神護寺裏参道の修理が行われ、林内中央を横断する苔むした歩道にも碎石が敷かれた。これにより、森林の空中湿度が少し低下し始めた。

1996年

4月25日、シロヌメリタンポタケ（仮）を撮影し、標本を姫路科学館へ収めた。

赤穂市による高雄山里山整備事業で、見晴らしを良くするために小高い周辺の頂上部の樹木が伐採され、山頂部への遊歩道が作られた。森の老木も併せて伐採され、森林内は以前よりも明るく、風通しも良くなったが、一段と空中湿度が低下した。

1998年

3月21日、2か所目の発生地にてシロヌメリタンポタケ（仮）を撮影し、標本と写真を冬虫夏草菌研究会の杉山信夫氏へ寄託した（図2）。この写真は後に「冬虫夏草菌研究会通信」の創刊号表紙にモノクロで使用された。



図2. 1998年に発生したシロヌメリタンポタケ（仮）。

1999年

3月18日、シロヌメリタンポタケ（仮）を撮影し、8本を確認した。

4月29日、老菌を確認した。

赤穂市による「赤穂ふれあいの森」事業で、簡易宿泊施設の高雄山荘やキャンプ施設、トイレ、フィールドアスレチック、展望舎等が整備された。また、林内を横断する歩道も拡張され、上下水道の配管などが埋設された。同時に環境緑地保全地域内の古木も間引伐採され、より明るい森になったが、林内の空中湿度はより一段と低下した。

2001年

3月3日～3月31日、姫路科学館の「きのこの不思議展」でシロヌメリタンポタケ（仮）の標本が展示され、同時に発行された冊子に生態写真が掲載された（図3）。

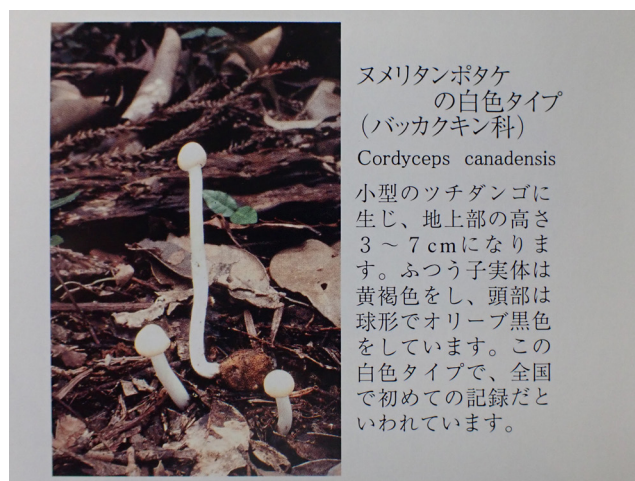


図3. 姫路科学館の「きのこの不思議展」冊子（小松保彦[編]、「きのこの不思議展」図録、p.10、姫路科学館[2001年]）に掲載（姫路科学館の許可を得て転載）。撮影：平山吉澄。

2003年

3月22日、3月29日、4月12日、シロヌメリタンポタケ（仮）を撮影した。

4月18日、シロヌメリタンポタケ（仮）を2か所目の発生地にて撮影した（図4）。

4月20日、成熟子実体を採取した。

4月25日、標本と写真を幼菌の会・日本菌学会会員の奥沢康正氏へ寄託した。

2005年～2008年

著者自身の重点観察地を他の地域へ移したこともあって、タイミング良く訪れることが出来なくなり、撮影はしていないが、老菌に出会う等して発生は確認出来ていた。しかし、発生子実体数は減少していき、出会えない年もあった。



図 4. 2003 年に発生したシロヌメリタンポタケ（仮）.

この間に林床を覆っていた苔の面積が激減しており、5 か所で群生していたヌメリタンポタケの発生が 2 か所となり、その発生量も激減した。

2009 年

3 月 28 日、ヌメリタンポタケは発生していたがシロヌメリタンポタケ（仮）には出会えなかった。

2010 年以降

大雨で盆地周辺部の小高い頂上部から表土が流出し、発生場所である扇状地が土砂で覆われてしまった。同じ頃、井戸の背後に在った高さ 7 メートル程の石垣も崩落し、神護寺庫裡跡の平屋も倒壊してしまった。

近年

残る一か所の発生場所もかなり乾燥化し、ヌメリタンポタケをはじめ、カラムラサキハツやキチャワンタケ等、かつてその時期に発生していた菌類も見られなくなった。

終わりに

市民に、もっと自然に親しんでもらおうと「赤穂ふれあいの森」事業を行うことには理解出来るが、兵庫県が環境緑地保全地域に指定したのであれば、環境や生物多様性保全に十分配慮し、もっとダメージの少ない、別の方法や事業内容にするべきだったと考える。